２０２４．２．１８．主日礼拝説教

聖書： マタイによる福音書 9章 9〜13節

『 行って学びなさい 』

「マタイを弟子にする」という小標題が掲げられます。この世の常識や伝統的理解を打ち破るためには何が必要かという命題が提案されてゆきます。

そこにはまず自分の固定観念や偏見という思い込みが打ち破られなけければならないということが主張されてゆくのです。

マタイの描き出す「福音に与る」という出来事、これは一体どういうことだったのかを考えます。

当時の社会では「宗教」とはいわばヒット商品でした。巷に溢れかえる現世利益宗教は、外にはローマの圧政と内にはユダヤ教の締め付けが厳しくなればなるほど、それらからの抜け道を模索するかのように流行を繰り返していました。これらの宗教は商品と同じで購入する対象でした。高額な金品、怪しげな教えや修行といった犠牲を耐え抜いた者だけが対価としての「救い」を獲得出来たのです。ユダヤ教も離反者を減らすために同じシステムを導入していました。多くの規程にがんじがらめにされ、献げ物が強要されました。この競争の勝者がファリサイ派や律法学者という自他共に認める正統派ユダヤ教徒として尊敬を身に纏ったのでしょう。

しかし、これらの世界観に対して福音書記者の記す「福音に与る」という問題提起はまさにアンチ・テーゼでした。本日の箇所では徴税人が登場します。マルコ2;14では「レビ」ですが、ここでは「マタイ」という名が用いられます。どちらもヘブル語系ですので、同一人物が二つの名前を持つのは不自然なことです。また本書の著者とも別人物です。この徴税人とはローマ支配下の属州において広く用いられた徴税システムに携わる人々でした。彼らは一定地域の徴税金を前払いの入札によって購入する徴税請負人で、入札分以上に徴収した過

剰分が収入となりました。有り体に言えば徴税人は儲かる職種でした。だからやっかみ半分で売国奴的職業として人々に憎まれ、汚れた者の象徴として蔑視されていました。

　そのマタイにイエスは近づかれます。すかさずファリサイ派は「なぜ」と問います(11)。当然の質問だったことでしょう。神は正しい者、つまり律法を遵守される側に傾かれるというのが常識だったからです。この価値観が世界を支えているとファリサイ派や律法学者は夢疑わなかったということです。　しかし、イエスは違ったのです。ここでは被差別の側に歩みを進められる姿が印象的に描かれます。けれども、ここで神が傾かれる対象は単に被差別者擁護推奨という意味ではありません。

　わたしたちはいろいろな意味で迷いの中を生きています。そして、それをいつかは克服できると考え、その願いを信仰に託しがちです。しかし、信仰は迷いに終止符を打つものなのでしょうか。むしろそれは、低きについて迷いから安易に逃れようとするものに、高きを思わしめ、迷いへと招くもののようです。所詮は迷いに他ならない人生に、毅然と直面せしむるものではなかったかと思うのです。

　マタイの問いとは「あなたの信仰の確認」なのです。つまり、この迷いに佇めという正しい迷い方の勧めなのでしょう。イエスは徴税人という切り捨てる対象であった常識を打ち破って、まったく新しく共に生きる対象としての受け入れ直し作業を「行って学びなさい」とわたしたち一人ひとりの迷いの内に勧められるのです。